



UICC-Japanの長期活動ポリシー決まる

2014年UICC日本委員会総会より

本年度のUICC日本委員会 (UICC-Japan) 総会は1014年7月26日経団連会館で21施設代表、5役員、4名誉会員の参加のもとに行なわれた。今回、佐賀県医療センター好生会が加入し、メンバー組織は30となった。

田島UICC理事より、UICCの会員数は現在782 (正会員265) で更に増加していることや、理事会の中で2日にわたりbrain stormingが行なわれたことなどが報告された (記事を後に掲載)。野田フェロシップ委員、浅村TNM委員より報告があった。次いで垣添幹事から2月4日に津で行なわれた世界対がんデーシンポジウムに関し、300人の参加があり大変有意義な会となったとの報告を受けた。赤座ARO Directorより、2013年日本癌学会でのUICC session の報告があった。本年度は、以下の記事に見るように、多くの重要な活動計画が決定された。

UICC-Japanの長期活動ポリシー

北川委員長より、ニュースレター17号に書かれた歴史的経緯にそって説明があり、それに基づき9項目の [UICC日本委員会の進むべき道] (2、3ページに掲載) の提案がなされた。出席者からの賛成意見が続き、そのまま承認された。

「小学生からのがん教育を考える会」が発足

望月先生より、後掲の趣意書の説明があり、多くのコメントがあった。門田先生からは、がん対策促進協議会でも、早くから子どもの教育の重要性が認識され討議されて来たが、具体的な行動を提起するまでに至っていない。UICC-Japanとしてこのような企画を立ち上げることは意味がある。堀田先生より、健

目次

UICC 日本

2014年UICC日本委員会総会より.....	1～3
UICC-Japanの長期活動ポリシー決まる... ..	1～3
「小学生からのがん教育を考える会」が発足..	1, 4
UICC国際がん会議 (東京) 50周年記念行事 動きだす.....	2

特別寄稿

国際癌研究組織の誕生と その発展.....	菅野 晴夫 6
--------------------------	---------

UICC 世界

UICCの将来展望.....	田島 和雄 8
----------------	---------

UICC アジア

世界がん会議における UICC-AROの活動について.....	赤座 英之 10
------------------------------------	----------

康教育の一環なのか、命に向き合う総合教育の一環なのか、はっきりさせておく必要がある。垣添先生より、小学校からの教育と言うところに意味がある。多面的な見方が要るが、この計画にはいろいろな立場の人々が招かれているところが良いのでUICC-Japanだからできる、等々の意見があり、基本的には全員が賛同し発足が決まった(4ページに記事)。

UICC国際がん会議(東京)50周年記念行事動きだす

1966年のUICC国際がん会議(東京)の50周年を記念して一連の行事を行うことが決定された。前回の東京会議が10月22日から始まったので、同じ時期にと考えられていたところ、2016年のがん治療学会が丁度同じ時期に開催されることが判り、北川隆光先生からUICCとがん治療学会で共同プログラムを作っては如何かとの提案があった。この案は両組織の賛同を得るところとなり、2016年10月22日(土)横浜パシフィコのがん治療学会の一会場を提供して頂き、共通の問題意識によるシンポジウム、それに次

ぎUICCの話題によるミニサミット、更にその後夕刻より会場を変えて祝賀会が行なわれる予定である。

2015年の世界対がんデーシンポジウム

「小学生からのがん教育を考える会」の活動の延長として、関連したテーマで、2015年2月7日(土)の午後、がん研吉田講堂でシンポジウムを行なうことが決定された。

メルボルンで活躍するUICC-ARO

AROの赤座Directorより本年度の活動計画の説明があった。2015年12月3-6日にメルボルンで開催される世界癌会議では、第3日(Dec.5 昼)にUniversal Health Coverage on Cancer/NCDsのタイトルでARO主催のRound Table Discussionが、又第4日(Dec.6)にはAROのセッションEconomic burden of cancer in Asian countries: How should we face the current situation?が行なわれる(7ページに掲載)。

UICC日本委員会(UICC-Japan)の進むべき道

1. World Cancer Declarationの9項目を掲げてその実現のために努力するUICCの活動は重要であると認め共に歩む。
2. がん予防とがん患者の支援は今や社会的な大問題であり、いわゆる対がん運動組織に止まらず、がんに関わるあらゆる組織、医師、研究者も積極的に参画する必要があると考える。
3. UICC運動は、医師・研究者の参加があってより大きな力を持つものであるから、UICCの中で医師・研究者の存在が希薄化しないように努める。
4. UICCは研究的要素も大切にすべきであると考え、がん疫学、がん登録、がん教育学、および最新の予防、診断、治療、患者支援の技術を発展途上国で実施可能にする研究を振興する。
5. UICC-Japanには、多数の医師・研究者の組織や研究基金が対がん組織やその他の組織と共に集結している利点を生かしつつ運動を展開する。
6. 従来は実践活動が役員任せになりがちであったが、今後は各メンバー組織の中にもUICCの旗を明瞭に立てて、UICCのグローバルな動きに呼応した活動を強めて行く。
7. Asian Regional Office (ARO) の活動支援を通じてアジアにおけるUICC運動の振興を目指す。
8. 世界の対がん運動と日本を結ぶパイプを太くし、日本におけるグローバルな思想と行動を育てる中で、世界における日本の存在感を高めることに貢献する。
9. UICCの旗を高く掲げるが、日本の独自性は保持、ナショナルな組織として活動し、山極一吉田国際奨学金のスポンサーを続ける。

(2014年7月26日)

タバコ根絶をめざしてー

2014年日本癌学会UICC International Session

2014年の日本癌学会のUICC国際セッション (Sept27, AM) は、望月先生の企画で Ending the tobacco epidemic in Asia-Oceania: filling the gap by academic societies のタイトルのもとに行なわれる。学会の会員に対しても政府に対しても challengingな会となると期待される。

ラオスのがん登録とがん診療の現状調査

浜島先生が大学の使命でラオスを訪問する機会を捉え、中川原先生と共同で現状調査を行う。ラオスにはUICCは全く入っていないので、今後ラオスにUICCの旗を立てる可能性を追求する。

UICCの理事選挙をがんばる

2014年のメルボルン世界がん会議の前日、UICCのGeneral assemblyで理事選挙がある。日本は、12年間にわたり疫学委員長、各種委員、理事として活躍した田島先生が今回で勇退し、代わりに野田先生

を理事に送り込もうとしている。なるべく多くの方が voting delegateとしてGeneral Assemblyに参加し応援するように務める。

赤字予算案を承認

門田財務幹事が2014年の予算案を説明し、承認された。今年度の予算は約700万円の赤字予算であるが、いまのところ繰越金がかなりあるので、現在やるべきことを、当面の赤字を恐れず積極的に行なう方針である。

UICC-Japanの法的性格

戸山先生から、多くの金額を扱うUICC-Japanの法的性格につき不安はないかとの質問があった。北川委員長より、UICC-Japanは歴史的に(公財)がん研の傘の中に入っており、がん研の定款にも事業目的の一つとして“国内および国際的な対がん運動への参加協力”が謳われているので問題はないとの説明があり了承された。堀田先生より、全がん協も国立がん研究センターの中に置かれているが、それで良いようである、とのコメントが追加された。

Action Policy of the Japan National Committee for UICC (UICC-Japan)

1. Reconfirms the importance of the UICC working for the realization of the goals described in the World Cancer Declaration and goes together.
2. Recognizes that cancer prevention and patient support are now grave social problems which urge the active involvement of not only the people and organizations working in the specific fields but also all medical doctors and cancer researchers.
3. Believes that the participation of medical doctors and researchers has principal importance for UICC to be powerful and works to keep their presence in UICC activities.
4. Considers that UICC should not neglect research aspects and tries to promote cancer epidemiology, registration, pedagogy and devices to make the latest techniques for cancer prevention, treatment and patient support affordable in developing countries.
5. Acts by taking advantage of the participation of many researcher's and doctor's associations and cancer funds together with cancer societies and others among UICC-Japan members.
6. Encourages its member organizations to work more actively on individual basis in concert with UICC Geneva, refraining from leaving most activities to executive persons.
7. Aims to accelerate UICC activities in Asia by supporting efforts of the Asian Regional Office (ARO).
8. Contributes to increase the visibility of Japan in the world by joining the global activities of UICC.
9. Keeps UICC-Japan's unique stance to work as a national group and sponsor the Yamagiwa-Yoshida International Fellowship, while raising the UICC banner high.

(July 26, 2014)

「小学生からのがん教育を考える会」が発足

去る7月のUICC日本委員会の総会で、昨年より懸案であった

「小学生からのがん教育を考える会」の立ち上げが正式に決定された。提案は望月優美子委員を中心にまとめられ、幹事・役員会で検討されたものである。直ちに以下の趣意書をつけ発起人候補者に依頼上が送付され、ほとんど全ての方の賛同が得られている。第一回の会合は10月11日にがん研の吉田講堂で開催される。

趣意書

「小学生からのがん教育を考える会」の発起人にご参加のお願い

拝啓 残暑の候、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、私ども国際対がん連合(UICC)日本委員会は、がん制圧のために世界中の民間組織が協力して運動するUICCの趣旨に賛同、これに連動した活動を長く続けており、現在30の国内のがん関係の学会、がんセンター、対がん協会、がん基金、研究所、大学などが結集しております。ここ数年は、がん予防のための小学生がん教育の重要性を痛感し、世界対がんデーの記念行事として「公開シンポジウム：がん予防は子どもから(2010年・東京)」、「公開ワークショップ：小学生からのがん教育(2013年・東京)」、「公開シンポジウム：子どもにがん予防の姿勢を作る(2014年・津)」を継続して開催して参りました。

ご承知の通り、がん対策推進基本計画(第2期)では、がん教育の重要性が強調され、文部科学省の検討会やモデル事業が持たれ、がん教育への関心が高められて来ていますが、ナショナルレベルでの実効性と実質性のあるがん教育プログラムの政策は、まだ緒に就いたばかりと言えます。がん教育の目的と対象、内容や手法、そして担い手や実施の時期、評価方法など、まだまだ検討事項が多々ある段階ではないかと思えます。

私どものシンポジウムの討議においては、a)これまでの考え方では、がんの知識を教えるという指向性が強く、従って高学年が対象になっているが、小学

生のがん教育は「がん予防の生活態度を育む教育」と位置付けて早めに開始した方が良いので、中学生以上ではその観点からは遅すぎるのではないかと、b)小学校におけるがん教育は担任の先生が教えることに大きな意味がある、c)小学校の教育は保健のみでなく理科、社会、道徳などの時間も総合的に生かせる利点があり、d)更にまた小学校では保護者、教職員、地域の関係者が共同で取り組み、教育効果を増幅させていく事ができる、等などが指摘されました。また継続的に関係者が集まり、情報を共有しつつ議論を深化させる場を持つことの必要性が強調されました。

そこで今回、私どもは「小学生からのがん教育を考える会」を立ち上げることに致しました。なるべく広汎な関係者・関係機関にお集り頂き、相互交流を深める中で十分に検討し、効果のあるプログラムや教材の開発、評価、普及、提言を行うと共に、小学校の先生方によるがん教育の実践を、医師、研究者、他の専門的な立場の人々が支援する体制を構築することも視野に入れて活動して行きたいと考えております。

先生には、趣旨にご賛同下さり、是非この会の発起人となって頂きたく、心よりお願い申し上げます。

北川 知行
UICC日本委員会委員長
がん研究会がん研究所名誉所長

発起人リスト(五十音順)

赤座 英之(東大先端研総合癌研究国際戦略推進特任教授)、浅香 正博(北大がん予防内科学 特任教授)、池田 徳彦(東京医科大 教授、日本肺癌学会 理事)、上田 龍三(愛知医大腫瘍免疫 教授、がん対策推進協議会 委員)、衛藤 隆(母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 所長)、垣添 忠生(日本対がん協会 会長)、片野田 耕太(国立がん研究センターがん対策情報センター 室長)、河原 ノリエ(東大先端研 特任助教)、北川 知行(がん研名誉所長、UICC日本委員会 委員長)、大澤 正則(川口市立芝富士小学校 校長)、小林 博(札幌がんセミ

ナー 理事長)、桜井 なおみ (CSR プロジェクト 代表理事)、助友 裕子 (日本女子体育大 准教授)、田島 和雄 (三重大公衆衛生 客員教授、UICC 理事)、田中 英夫 (愛知県がんセンター研 部長)、外山 千也 (がん研究振興財団 専務理事)、中川 恵一 (東大病院放射線科 准教授、文科省「がんの教育に関する検討委員会」委員)、中川原 章 (佐賀県医療センター好生館 理事長)、西山 正彦 (群大病態腫瘍薬理学 教授、癌治療学会 理事長)、野田 哲生 (がん研 所長、日本癌学会 理事長)、浜島 信之 (名大医療行政学 教授)、樋野 興夫 (順天堂大病理・腫瘍

学 教授)、細山 貴信 (豊島区教育委員会 主事)、堀田 知光 (国立がん研究センター理事長)、増井 徹 (慶応大学 教授)、溝上 哲也 (国立国際医療センター国際保健医療研究部 部長)、道永 麻里 (日本医師会 理事)、望月 友美子 (国立がん研究センターがん対策情報センター 部長)、門田 守人 (がん研有明病院 病院長、がん対策推進協議会 会長、日本医学会 副理事長)、若尾 文彦 (国立がん研究センターがん対策情報センター センター長、文科省「がんの教育に関する検討委員会」委員)

UICC 日本委員会と UICC-ARO のロゴマークが出来ました。



UICC-ARO
UICC ASIA REGIONAL OFFICE

国際癌研究組織の誕生とその発展

がん研究会がん研究所 菅野 晴夫
UICC日本委員会名誉会員

欧米の主要都市に癌病院や癌研究所が設立されるようになったのは、19世紀末の頃である。癌は死に至る病で、その本態も原因も分からず治療法も殆どない怖るべき病気である。その癌がいま殖え始めており、その解決は一国のみでは不可能で国際間の協力がどうしても必要であるとの認識とその気運がもり上がっていた。

万国癌研究協議会の設立

国際癌組織と云えば誰しもUICC（国際対癌連合）を思い浮べるであろうが、実はその前身があった。それはドイツを中心にした万国癌研究協議会である。

20世紀の初め、ドイツのライデン（内科）、ツェルニー（外科）、エールリッヒ（免疫）が中心となって万国癌研究協議会の設立を各国に呼びかけ、1908（明治41）年ベルリンに於いて発会式が行われた。デンマーク、フランス、ロシア、アメリカなど13か国が参加した（英は不参加）。

日本も1907（明40）年招待を受け、急ぎその受け皿として癌研究会を学官財政で設立し、加盟した。1908年（明8）4月のことである。癌研究会創立の趣旨は、「癌を撲滅し、以て人類の福祉に貢献する」にあった。癌研究会設立の中心は青山胤通、山極勝三郎、洪澤栄一、桂太郎であった。ベルリンの発会式には日本代表としてベルリン留学中の秦佐八郎ら3名が出席した。

実は、独ライデンらの招待はその何年か前にもあった。その時、青山、山極らは日本が先生の国ドイツと一緒に癌研究をすすめることはおこがましいと返事を出さずにいた。ところが、日露戦争（1909-10）に勝利して意気上がっていた日本に再び招待状が届いたので加盟することにしたとのことである。青山は会頭として癌研究会の発会式でこう述べている。

……若しこの癌研究に於いて、我が国の学者が欧米先進国の研究よりもより多くよりよいところの結果を得ましたならば、我が国の国際間における

同情と尊敬は、かの数10億円の金を投じ10数万人の人命を賭して得たる所のものより多かろうと思いません。……、と。

武よりも文の国日本をつくるのが日本の道であると明確に述べられており、肅然とさせられる。その1年前山極が専門誌癌（GANN）の創刊の辞にも同様のことが述べられており、当時の指導者の志を知ることが出来る。

協議会は会合を重ね、第3回協議会（1913年）はブリュッセルで開催され、藤浪鑑が出席した。

第1次世界大戦の勃発

このように万国協議会は順調に出発したかにみえたが、第1次世界大戦（WWI）（1914-19、大3-8）がはじまり、集会は中断せざるを得なかった。

ドイツは惨敗した。大戦後、1923年、市川厚一がストラスブルグの協議会に出席したが、戦後のドイツの疲弊は著しく、のみならず、国際科学界は毒ガスの使用などでドイツを非難し、ドイツ科学と科学者をボイコットする運動が広がっていた。この時、日本、長与又郎はドイツ制裁は学問の自由に反すると国際制裁に反対した。このことは記憶しておきたい。

国際対癌連合（UICC）の設立

WWI後の世界は国際連盟を中心に新しい体制づくりを急いでいた。国際癌組織もドイツ主導の万国癌協議会を解消して新しい組織を模索するのは当然の成り行きでもあった。

1928（昭3）年、新しい国際癌組織の設立打ち合わせ会がロンドンのロイヤルソサイティで開かれた。各国代表15名の中に日本代表長与又郎、市川厚一がいた。長与は幹事になった。WWIでは日本は連合側として勝利し5大国の1となり、国際連盟でも常任理事国となっていた。

長与日記によればこの打ち合わせ会で

- ・ 国際会議を3年おき位に開くこと。各国より臨時の委員を出すこと（日本は長与、市川）
- ・ 各国は正式委員4人以内（専門家と一般人）を出

すこと

- ・ 次回はマドリッドにすること

などを決め、Leiterを臨時代表者とした。

1933 (昭8) 年マドリッドで第1回設立会議が開かれ、日本からベルリン留学中の鈴木遂が出席した。ここで新組織の名称をUICCとすることが正式に決まった。UICCではこれを、第1回UICCコンGRESとしているが、内容は設立事務会議であった。翌1934年UICC創立の式典がパリで開かれ鈴木遂が日本代表として出席した。

この様にしてドイツ中心の万国癌研究協議会から国際連盟 (英米仏) 中心の国際対癌連合に移行したのであるが、この間かなりの時間がかかっている。国際組織をつくる、ないし、変えることは容易でないことを示している。

しかし、内容的には両者に余り差がなく、国際癌学会的側面と国際対がん協会的側面の両面を持っていた。この意味でUICCは万国癌協議会を受け継いだと云ってよいと思われる。

1936 (昭11) 年、第2回UICCコンGRESは、ブリュッセルで開催された。学術発表を伴う初めての本格的な会議で、在ベルリンの吉田富三が日本代表として出席、アゾ肝癌を発表して感銘を与えた。吉田は詳しい会議報告書を長与に提出している。

吉田は後年、“世界の主な癌研究者となる研究者の殆どが出席していた、また、次のコンGRESを日本で開催して欲しいと云われたが開催に至らなかった”と云っている。この様にしてUICCは順調に進むものと思われた。

第2次世界大戦と冷戦、雪解け

しかし、次の第3回1939年は米のアトランティックシティで開かれたがその年、第2次世界大戦 (WWII) 1939-45 (昭14-20) 年がはじまり、それ以降コンGRES開催は中断させられた。日本、ドイツは敗戦国となってWWIIは終わった。

1947年第4回セントルイス、1950年第5回パリ、続いてサンパウロ (1954年) ロンドン (1958年) とコンGRESは順調に開催されたが、WWII後、東西の冷戦が続き、コンGRESは西側諸国が中心であった。

幸い1962 (昭37) 年第8回モスクワのコンGRESは冷戦終結による雪解けで全世界が1つになった画期的な会議となり、多くの国々から多数出席し、雪解けの自由を楽しんだのであった。

後年、吉田は” ロンドンの次はトーキョーに内定し

ていたのだが、ソ連 (モスクワ) が割り込んで来たので譲って、先にやってもらった”と云っていた。

UICCの黄金時代

モスクワに続く1966 (昭41) 年第9回東京コンGRESは、吉田富三を大会会長とする東西融合の記念すべき大会であった。すなわち、前年にUICCの同意と支持によってWHOの下IARC (国際癌研究機関) がリオン (仏) に開設される、パキット腫瘍が化学療法によって治癒することが報告される、ラウスとハギンズがノーベル賞を受賞するなどの慶事が続く。

吉田は永年、30年も暖めていたコンGRESを美事やり遂げた。吉田のコンGRESはUICCにとっても、日本の癌研究にとっても近代化をもたらすものであった。

次の1970年、米ヒューストンにおける大会では、テミンにより逆転写酵素の発見が発表され、分子腫瘍学の幕開けとなるなど優れた成果が目立つようになった。以来40年余りUICCの輝かしい時代が続くことになる。

そして1986年ブダペストの大会では欧州のいくつかの国で癌死亡率がプラトーに達したとの注目すべき発表があった。次の1990年ハンブルグの大会では禁煙運動が大々的に計画実行され、出席者を驚かした。世界の癌情勢、そしてUICCは確実に新しい局面を迎えつつあるように思われた。

UICCの新しい局面

UICCは、このような情勢の変化を踏まえて2006年ワシントンDCの大会以降コンGRESを2年に1回 (これまでは4年に1回、中間会議とシンポジウムをその中間に行う) とし、UICCの運営目標を研究、治療からがん予防、がん支援などの対がん運動へと方向を大きく転換することになった。このことはUICC日本の総会でUICC理事田島和雄から報告が逐次なされた。また、北川知行委員長が本ニュースに丁寧にかかれている。UICCはUICCの持つ国際癌学会の面を弱めて国際対がん協会の面を強調して行くことにしたものと了解される。

UICC日本はどうする

国際癌組織の辿った100年は多くの曲折があった。特に前半50年には2度の世界大戦とその前後の困難な時期があり、集会不能、また、組織崩壊の危

機もあった。しかし、癌を何とかしたい、癌を何とかしなければという国境を越えた人々の心は強く結ばれて此等の困難を乗り越えて、後半50年の実り多い黄金時代を迎えたことは誠に幸であった。平和の尊さを思わずにはいられない。

UICCも、その前身の万国癌協議会も、癌を制圧するため2正面作戦をとって来た。1つは癌本態の解明、癌治療の開発を目標にした癌の学問であり、他は現に苦しんでいる癌患者の支援、がん予防の対がん運動である。

癌の研究がすすみ、癌治療もすすみ、癌患者が増えてくるにつれ、夫々の正面には、解決しなければならない多様な課題が山積してくる。それで最近のUICCは前者は他に委かせ、後者に専念しようとしているように思われる。確かに現実的にとり得る賢明な選択の1つであるかもしれない。UICC日本はどうか。

これまで見て来た様に、日本はUICCとその前身、万国癌研究協議会の誕生の時から100年余り一緒に歩んで来た。苦労を共にしてきたと云っても過言でないと思う。日本は教わるが多かったが、日本も随分貢献して来たと思う。改めて先人の努力と苦労に敬意を表したい。さて、UICCは大きく変わって来た。日本がどうするかはUICC日本委員会が賢明にして明確な方針を打ち出されている。私も大賛成である。そこでこの先について私個人の意見を少し述べてみたい。

多正面作戦の展開を

私個人は、2正面作戦を続けてもらいたい。さらに云えば多正面作戦を展開してもらいたいと思っている。UICC日本のメンバーは癌に関連する総ての団体で構成されている。これは大変重要かつ貴重な組織であると云わなければならない。我々には残念ながら金も権力も力もない、しかし、知力と癌と癌患者を何とかしたいとの熱意がある。しかも全日本の立場に立って考えている。

では、どうすればよいのか。まず、我々のやる事は、癌の研究、治療、予防、患者支援、対がん運動の全てに対応し、これらを包み込むこと。まず、薄いが強靱で柔軟なネットワークで日本全国を覆うことではなかろうか。そして、UICC日本のメンバーの全員が、それぞれの友人、知人と語らって知恵を出し合って優れたシンクタンクを形成することではなかろうか。そのためには賢い戦略を練る必要があろう。

この様な行き方は、UICC全体にとっても、アジアの諸国にとっても望ましいのではなかろうか。

我々は100年前、国際癌研究に参加した青山、山極らに思いをたくし、長与、吉田が、また吉田以後の多くの先人が志を受け継いで夫々に新しい時代を拓いてきたことを見てきた。

いま、UICC日本は新しい局面に直面している。UICC日本は独自性を大切にし、そのメンバーの持てる力を十分に発揮して新しい21世紀を開いて行くことを期待したい。



国際対がん連合(UICC)理事会報告

UICCの将来展望

国際対がん連合理事、UICC日本に委員会総務幹事 **田島 和雄**

UICC理事会の役割

2014年4月28～30日(月～水曜日)にジュネーブにおいて1014年度の前期の理事会が開催された。主な報告・討議内容は、1) 理事長・CEO報告、2) 委員会報告、3) 世界がん会議、4) 世界対がんデーなどに関する事であった。しかし、今回は現理事長(Dr. Gospodarovicz)が最終

年度ということで、一日半かけた特別企画、将来のUICC活動の方向性と戦略に関するBrain Storming(BS)が企画され、2030年を目標にUICCが優先して取り組むべき課題について徹底討議した。それは、現理事会による活動が平成26年12月初旬の世界がん会議(WCC)の総会で終了するので、新理事会への活動計画の引き継

ぎのためにも重要な議論であった。つまり、次期理事長と新理事体制が UICC 活動を円滑に推進していくためには、現理事体制の補佐が極めて重要と合意したからである。

Brain Storming (BS)の企画準備

BS の企画はディベートの専門家でもある米国の Dr. David Weiss を中心に組まれていた。まず、理事会の数か月前から各理事、本部の各プログラム担当者、一部の会員などを対象に 30 分余りを要する質問紙調査が行われた。主な質問内容は二項目、1) 2014 年までの UICC 活動で何が実現して何を積み残したか？ 2) 2025-30 年までに何をなすべきか？ それらの回答内容を受け、企画者の Dr. Weiss が各解答者に電話インタビューによる意見聴取を行った。理事会の BS ではそれらをまとめた内容がスライドで示され、これまでに UICC が抱えてきた問題点や将来の対がん活動推進のために取り組むべき課題などが指摘された。理事会で重要な優先項目を絞り込み、最終的に以下のような 3 項目、1) Beyond WHO、2) Hold the world to account UICC、3) Harness an Army などに取り上げられた。全理事は三グループに分けられ、各項目間で相互に補完すべき内容も含めて徹底的に討議した。それら討議・承認された内容は UICC 本部や UICC 日本委員会の将来にとっても重要と考える。

UICCの将来活動を展望

UICC の将来活動に向け、全理事はあらゆる知恵を出し合って真剣に討議したが、主な合意内容について私見を交えて以下のように簡単に紹介する。

第一点の "Beyond WHO" は、政府機関である WHO では不可能な活動を NGO 組織の特徴を活かしながら展開していく。具体的には地球規模の対がん活動を展開していく責任ある組織として、各地域のリソースを活用し、ボトムアップ的な対がん活動を展開していく。

第二点の "Hold the world to account UICC" は、UICC 活動を世界の人々の目に見える活動と

して展開していくことで、具体的には、地球規模で対がん活動を展開するためのアドボカシーの基盤作りとその強化であり、UICC が一般人、政府、知識人らが一体化するための基盤組織になるべきである。そのためには、WCC や UICC 年報を介したエビデンスに基づく対がん活動の展開と情報提供、さらに本部のみならず各地域における活動の強化 (ARO 活動が認知されつつある)、なども重要課題となってくる。

第三点の "Harness an Army" は、UICC 活動を効率よく展開するための組織作りとその手段を保有する。WCC、NCDA は勿論のこと、地球規模で共有できる対がん情報を提供するプラットフォームを持続的に形成する。特に、UICC がこれまで力を注いできた Capacity Building の重要な活動の一つとして若手リーダーの育成をさらに強化すべきである。そのためには UICC の中に新しいセクターを設ける必要もある。また、地球規模のパートナーシップを形成していくことは対がん活動の重要な手段となるので、その強化を今後も図る必要がある。

その他の報告事項

今回の理事会で承認された主な内容を紹介しますと、1) 現在の会員数は総計 782 施設 (正会員 265 施設、準会員 124 施設、GNMs393 施設)、2) 12 月に開催予定の WCC 総会で新理事・理事長の改選を予定しており、候補者 71 名から現理事 12 名を含む 24 名を推薦、3) 2015 年度のサミット開催国は中近東諸国、2018 年の WCC は五か国から開催計画の応募があり、アジア諸国の三か国、インド、マレーシア、シンガポールを選出、4) 今年の世界対がんデーは "Debunk the Myths" をテーマとして世界 124 ヶ国で 674 のイベントが開催された。2015 年のキャンペーンはこれまでの活動を包括する目的で "Not beyond us" と定め、1) 健康増進と一次予防、2) 早期発見による二次予防、3) 包括的治療の展開、4) 生活の質向上、などの活動テーマが承認された。世界対がんデーは UICC の地球規模の対がん活動として世界に定着しつつある。

世界がん会議におけるUICC-AROの活動について

UICC-ARO Director 赤座 英之

きたる12月3日より6日まで、オーストラリアのメルボルンにて世界がん会議 (WCC) が開催される。AROは、この会議に二つのセッションをもって参加することが、先のUICC 国内委員会で認められた。

セッション開催の基本的考え方

昨年中国天津で開催されたAPCC期間中、UICC CEOのケリー・アダムス氏も交えた企画の中で、UICC-AROのミッションとして

「UICCとしての、アジアにおける対がん活動に関するビジョンを明確にする。そのために、情報収集や学会活動(支援)を、計画・実行し、得られたエビデンスを、UICC 本部に提示する」と報告したが、その基本姿勢は、今度のメルボルンでの活動においても継続したい。

メルボルンにおいては、AROとして二つのセッションを予定している。

12月5日にUniversal Health Coverage on Cancer/NCDs のタイトルでのRound Table Discussionを、そして、12月6日には、Economic burden of cancer in Asian countries: How should we face the current situation? というセッションを企画した。

昨年来、私は、今回の世界がん会議の準備を行う日本の窓口として、アジア地域の電話会議を、ジュネーブ本部と行ってきた。その電話会議においても本部より再三にわたり、スポンサーセッションの提案を求められてきたので、北川委員長と相談のうえ、本部への寄付という意味合いももたせながら、ラウンドテーブルであれば、すでに決定していた12月6日のセッションと連動したものとして開催できると返事をした。そういう経緯で、2日間連続のセッションとなった。

Universal Health CoverageとUICC

今回、Round Table discussion のテーマとして選んだ、Universal Health Coverageは、「すべて

の人が、適切な健康増進、予防、治療、機能回復に関するサービスを、支払い可能な費用で受けられる」ことを指すものであり、近年国際保健のなかでも注目が高まっている概念であり、特に、がんは、Universal Health Coverageの中でも、究極の課題である。WORLD CANCER DECLARATION の Target 01 (Health systems will be strengthened to ensure sustained delivery of effective and comprehensive, patient centred cancer control program across the life-course) にもかかわる課題であり、UICC活動の方向性に沿ったテーマであると考ええる。

ラウンドテーブルにおいては、WHOから野崎慎仁郎先生にお越しいただき、冒頭で、Universal Health Coverage を巡る最近の流れとともに、我が国の基本的なスタンスとしてNIPPON INISATIVE INITIATIVE ON UHC の構想について、昨年6月に外務省が発表し、9月に首相が国連総会で演説した国際保健外交戦略の考え方を具体化した中の構想として位置づけてお話いただく。このNIPPON INISATIVE INITIATIVE ON UHC とはUNIVARSAL HEALTH COVERAGEに関する日本とアジアの知見を国際社会に発信しようという構想であり、私は、教室として参加を要請されてきているものだが、今後UICC-AROとしても参画していきたいと考えている。

限られた医療資源のなかでのUniversal Health Coverageの適用と拡大のためには、各国ごとに強力なリーダーシップと政策が必要となる。アジアにおける実現のために何が必要か、現状把握と課題への方策を各国の主だったメンバーと討論してアジアとしての問題意識の共有をはかり、UICC本部に提案したい。

討論を行ううえで、問題意識の共有のためには、社会科学的枠組みが必要であり、アジア諸国の比較研究のための大規模調査プロジェクトに携わっておられる東京大学の園田茂人先生にアジアの横断的な比較研究のあり方についてお話いただいたのち、

討論を進めたい。

6日は、Universal Health Coverageの重要な構成要素であるがん医療費用負担に関する現状について議論を進めたい。これは、これまで、日本癌学会のUICC国際セッションとして、UICC-AROが連続としてとりあげてきたテーマであり、今までの知見をもとに、現状の課題と展望を世界癌会議という場で共有して発展させていきたいと考える。

UICCの活動におけるアジアとは？

グローバルヘルスの世界は、欧米主導で展開しており、アフリカに注目がいくなか、UICCにおいてもその傾向が強いが、癌の急増地帯はアジアであり、世界がん会議という重要な機会に、アジアの現状を世界と共有できる有意義なテーマ設定をして、今後の戦略的ビジョンを示していかなければならないと考えている。

今回の二つのセッションは、UICC-AROとして、中国のDr.Hao 韓国のDr.Rhoと日本の私の3人の共同座長という形で進行させていただく予定である。今年2月には、この準備会合を大学間連携のセミナーの機会を利用してソウルにて行っている。アジアのがんの社会的決定要因を探り、UICC世界対がん宣言のアジアにおける実現をめざすために、優先課題として何にフォーカスを絞ればよいか。日中韓3国で協力してUICC-AROとして、アジアの癌連携政策への提言活動を行っていくことを合意した。東アジア情勢は緊張状態が続いているが、UICCのなかでアジアのがん対策を考えていくためには、日中韓が連携した取り組みが必要であり、2月の準備会合には、ソウルにある日中韓3国協力事務局にも参加していただいた。この事前会合において討議したテーマも盛り込んで、アジア各国の意見をとりまとめて、報告書の形でまとめていきたいと考えている。

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	アジアがんフォーラム
大阪府立成人病センター	神奈川県立がんセンター
(公財)がん研究会	(公財)がん研究振興財団
(公財)がん集学的治療研究財団	静岡県立静岡がんセンター
国立がん研究センター	埼玉県立がんセンター
佐賀県医療センター好生会	(公財)佐々木研究所
(公財)札幌がんセミナー	(公財)高松宮妃癌研究基金
千葉県がんセンター	東京慈恵会医科大学
がん・感染症センター都立駒込病院	栃木県がんセンター
新潟県立がんセンター	日本癌学会
(一社)日本癌治療学会	(公財)日本対がん協会
日本乳癌学会	日本肺癌学会
(公社)日本婦人科腫瘍学会	東札幌病院
(公財)福岡県すこやか健康事業団	(公財)北海道対がん協会
三重大学医学部附属病院	宮城県がんセンター

賛助会員 (山極-吉田国際奨学金)	協和発酵キリン株式会社
(がん予防活動)	アメリカンファミリー生命保険会社
	グラクソ・スミスクライン株式会社

UICC 日本委員会の委員と役割分担

委員長	北川 知行	UICC 本部	
幹事 総務	田島 和雄	理事	田島 和雄
学術	垣添 忠生	Fellowship 委員	野田 哲生
財務	門田 守人	TNM 委員	浅村 尚生
監事	高木 敬三		
	池田 徳彦	アジア・太平洋癌学会 (APFOCC)	赤座 英之
専門委員会			
疫学予防委員会	浜島 信之	アジア・太平洋がん予防機構 (APOCP)	Malcolm A. Moore
喫煙対策委員会	望月友美子		
患者支援委員会	北川 雄光	UICC-Asia Regional Office (ARO)	赤座 英之
TNM 委員会	浅村 尚生		
広報委員会	河原ノリエ		
小児がん委員会	中川原 章		
対がん協会	伊藤 正樹		

UICC ホームページ : www.uicc.org
 UICC 日本委員会ホームページ : www.jfcr.or.jp/UICC